

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 5 日現在

機関番号：10102  
 研究種目：基盤研究(B) (一般)  
 研究期間：2014～2016  
 課題番号：26285170  
 研究課題名(和文) 学力困難地域における学校・家庭・地域を通じた総合的な学力向上推進方策に関する研究

研究課題名(英文) Human Resources Development through Community&School

研究代表者  
 玉井 康之(Tamai, Yasuyuki)  
 北海道教育大学・教育学部・教授

研究者番号：60227262

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 6,000,000円

研究成果の概要(和文)： 今回の研究成果は、学力向上に向けた方策としては、狭い意味での得点獲得の方法ではなく、生きる力に向けた思考力・実践力や学びに向かう姿勢などのトータルな資質・能力の向上策が、長期的な学力や総合的な能力を発展させることを明らかにしたことである。子どもの学力問題は、すでに学力だけで捉えても学力は見えず、生きる力の一環としての資質・能力形成の中で捉えなければならない。総合的な能力は、学習活動・学級経営・生活指導・特別活動などの学校教育課程だけでなく、自然体験活動・社会体験活動・生活体験活動などを意識的に提供したり、家庭での生活習慣を改善し地域の人間関係を築くことも、発達の大きな条件となる。

研究成果の概要(英文)： This results of research are to have clarified that a good plan of nature, the ability that is total such as an intellectual power, practice for the power to live not a method of the score acquisition in a narrow meaning or the posture to leave to learn for develops long-term scholastic ability and the general ability for a policy for the scholastic ability improvement.  
 Even if the issue of scholastic ability of the child already catches it only with scholastic ability, the scholastic ability must arrest him in nature, the ability formation as the part of the power to live without seeing it. The general ability provides natural experience-based activity, society experience activity, life experience activity as well as the school education courses such as learning activity, classroom administration, living guidance, extracurricular activities consciously, and it becomes the big condition of the development I improve a lifestyle at the home, and to build the local human relations.

研究分野：地域教育経営

キーワード：総合的な能力 資質・能力 探究活動 社会に開かれた教育課程 カリキュラムマネジメント 地域学校経営 教科学習 学習習慣

### 1. 研究開始当初の背景

研究当初は、学力困難地域の学力概念と学力向上策を検討することが重要な課題であった。この学力困難層の課題を追求する上で、従来型の教科の知識を中心とした学習方法は、上位層には適応できるが、困難層には、総合的な認識を高めていくことが重要であるという結論となった。したがって、学習活動に加えて学級経営や精神的支援、子どもの生活における人間関係・体験的な活動・地域活動などもこれらの学力向上方策に加わることが明らかとなった。

### 2. 研究の目的

学力概念も幅広くなり、思考力・実践力・人間性などを含めた総合的な考え方であるため、総合的な能力をいかに育成するかを明らかにする。このことが、学力困難層の学力も引き上げ、全体的に学力向上につながっていく。

### 3. 研究の方法

学力を測定できる分野だけでなく、測定できない分野に関して、子どもたちに関心を持たせ、また実感認識を中心とした学習指導方法や生活指導方法を、理論的な位置づけから分析した。

### 4. 研究成果

本研究は、次世代に求められる新しい能力観を踏まえながら、能力形成の課題を複合的・横断的にとらえたものである。その結果、子どもの学力においても、子どもの発達・教育の条件としての“総合的な能力”育成が不可欠で、その必要性和条件を総合的に明らかにすることができた。この“総合的な能力”の育成が、最終的には生きる力につながるものとしてとらえている。

この“総合的な能力”の中には、学校段階での教科の力も含まれるが、教科外の学校生活・集団生活や生活支援・発達支援も含まれている。さらに教科の中には、既存の教科の枠の中だけでなく、横断的な内容や思考力・実践力といった新たな能力概念や思考を支援するための指導方法も含まれている。

現代に求められる子どもの発達と学力・能力は、小中学校から大人になるまで長期的・生涯的に連動する能力が求められている。また教科の学力・能力も、その分野だけで展開するものではなく、あらゆる分野の能力と横断的・重層的に連動しており、子どもの概念形成力を含めた創造的な思考力を育むことで、総合的な思考力・創造力を生み出していくことが求められている。この創造的な思考力を含めた、子どもの“総合的な能力”の育成が、結果として生きる力を育成することにつながる。

このため、子どもの能力の育成も、学力・能力の概念を広くとらえる必要があり、本研

究では幅広い成長や発達を含む概念として“能力”の用語を用いている。また能力の総合的な成長・発達を目指すものとして、“総合的な能力”の用語を用いている。子どもの能力も様々な能力が絡み合い、連動しながら概念形成力として発展している。そのため、概念形成力を培うことができれば、それぞれの領域を超えて応用的・総合的に特定の能力を他の能力に活かすことができる。このような“総合的な能力”の育成の観点から、本研究では、あらゆる専門分野・研究成果から、それぞれの特性を基盤にした横断的・重層的で創造的な能力の開発の必要性をとらえるとともに、それらが有機的に連動する“総合的な能力”の育成の課題と方法をとらえている。

日本の場合は、子どもの発達はいわゆる得点で計られる「学力」でとらえられる傾向が強く、能力一般の中での「学力」が大きな位置を占めている。これは日本と韓国・台湾などの東アジアの特徴でもある。とりわけ入試では、公平性・客観性が重要な評価指標となるため、高校入試も大学入試もある程度統一的な入試制度と入試内容が実施される。すなわち中学受験・高校受験・大学受験を段階的に経る中で、全国的統一的な内容や得点で到達度が計られるために、それによって進路の方向性が決まる場合も少なくない。このため保護者の認識の中にも、大学まで入力を獲得することが人間の能力の重要な要素を構成していると意識されることも少なくない。

一方欧米先進国の中では、大学入試までは統一した入試がなく、個々の活動実績や学習記録を持ちこんだポートフォリオで評価される入試が多い。したがって国際学習到達度調査テストで見られるような部分だけでなく、新しい活動や記録に挑戦したり、開発・創造物などの実績や集団をとりまとめる活動も評価の対象になる。このことは、既存の知識・技能の到達度だけでなく、知識と知識を結びつけ、新しい知識と技能を生み出す創造力や活動力が求められていることを示している。

一つの国の事例としてアメリカでは、KS/AV が能力観として用いられる場合が多い。目に見えるカリキュラムとしては、Knowledge (知識) と Skills (技能) があるが、その背後には、潜在的カリキュラムとして Attitude (態度・心構え) と Values (価値観・判断能力) がある。むしろそれぞれの知識・技能も状況によって多様な内容が入り組んでおり、態度や価値観も多様な内容が含まれている。そしてこれらが有機的な連関を構成しながら能力が展開していくととらえている。

いわゆる学力・能力と言われる内容の中にも、言語リテラシー・数学リテラシー・科学リテラシー等の教科の読解力・リテラシーの他に、全身の機能・五感を使う能力・人間関係能力・意欲など様々な能力が複合的に絡み

合っている。例えば日常的に使われる能力の用語にも、順不同ではあるが下記のような能力が上げられる。学校での教科においては、指導要領の単元内容を中心とした「評価の観点」と評価方法が明記されているが、これらが複合的・横断的な関連を持って形成される“総合的な能力”については、一つ一つ分離してとらえることは不可能である。一つ一つの能力も、他の能力と総合的に影響し合って発展しているもので、その因果関係を明確にとらえることもできない。

#### 日常的に使われる“総合的な能力”

概念形成力、記憶力、メタ記憶力、メタ認知、好奇心、観察力、洞察力、発見力、鑑賞力、投影力、比較力、制作力、刺激反応、意志決定力、忍耐力、自律力、欲求不満耐性力、集中力、同時併行作業力、精神的回復力、情緒安定力、社会性、社会参画力、奉仕能力、生産意欲、企画力、責任感、持続力、体力、健康、手先能力、基本的生活習慣、人間関係調整力、コミュニケーション能力、非言語コミュニケーション力、リーダーシップ力、正義感、倫理観、規範認識、思いやり精神、包容力、順応力、協調性、信頼感、語彙力、表現力、対話力、討議力、批判的思考力、ICT操作能力、数量認識、調査力、想像力、創造力、類推力、演繹力、構造認識力、主体性、行動力、直感的判断力、決断力、達成志向力、達成感、昇華力、自己満足感、自己肯定感、自尊感情、自己認識力、省察力

日本においては、高度経済成長期までは知識・技能の獲得が重要な能力として位置づけられたが、高度経済成長期は追随型の経済成長であった。追随型の知識・技能の獲得で高度経済成長を遂げたが、その後日本の国内総生産は1998年にピークを迎え、これ以降は現在まで横ばい状態となっている。その時代での知識・技能を基盤にしつつも、次代に求められる能力としては、変化に対応した創造型の能力が求められるようになってきた。

すでにあらゆる生産・生活の身近なところで、自動制御装置や人工頭脳が現れている。アメリカのキャシー・デビッドソン教授は、子ども達の65%は、大学卒業後に今は存在していない職業に就く可能性が高いと予測した。この予言的な予測の通りでなくても、産業構造の急激な変化と共に、次代を生きる子ども達には、新しい創造的な職業に向けて、新しい思考力・実践力がますます求められる可能性は高い。これは、子ども達が、現在の知識だけを覚えても、次世代社会では対応できない可能性があることを意味している。

小中学校の学力は、これまでは比較的9教科・科目の体系性の中で、知識・理解の到達度が求められてきた。この日本の教科や科目自体も、歴史的には、国民科（国語・歴史・地理を含む）や理科（理科・数学を含む）

などの変遷がある。国際的には、「Economy」の教科の中に社会的な秩序・生活規律を含めたものがあつたり、「Safety」の教科の中に保健や道徳的な内容が含まれているものもある。これらの教科の内容や分類は万国普遍の同じものではなく、その国の文化・状況に応じて便宜上分類し、体系化しているものである。すなわち教科の体系性も便宜的に分類しているが、内容的には常に他の教科・領域と関連しながら変化しており、その内容は、固定的にとらえるよりも横断的総合的に発展していくものである。教科によっては、数学など国際的にも教科の体系性が比較的明確な教科もあるが、教科によっては単元の構成も横断的で複数の教科に関連づけられた内容が含まれているものもある。

学校段階別に見ると、小中学校では9教科であったものが、これが大学の専門分野になると何千という分野に専門分野が分かれ、またその融合的な分野や新しい萌芽的な研究では、常に新しい研究領域が生まれて来ている。大学の専門領域には、例えば教育学などまったく小中学校の教科の単元の中に入っていない領域もある。また一つの研究分野の中にも、様々な観点・立場からの諸説や正反対の論理があり、これらをさらにそれぞれの観点や反証的な観点から実証・議論しながら、より普遍的な真理が追究されていく。一つの現象を別々の研究領域からとらえると、全く新しい研究方法や新しい分野が生まれる場合もある。これまで定説であったとされる考え方が、科学と時代の変化とともに、全く新しい説に塗り替えられることもある。このように高等教育までを考えると、教科の固定的な専門領域を学ぶだけでなく、自らの知識を生み出す創造性が常に求められていることが理解されるであろう。

現在課題となっている生きる力の育成は、自ら主体的創造的に考え行動することが求められている。この生きる力は、これまで知識の総量と社会に求められる力が対比されて、社会の中で対応できる力があるかどうかで判断される場合が少なくなかったが、知識が役に立たないということではなく、知識の使い方や応用の仕方が求められている。さらに次の新しい学習指導要領の基盤となる能力観では、「思考力」「基礎力」「実践力」の3つの力が能力の構成要素として打ち出されている。この3つの構成要素として最も重要な構成要素は、「思考力」であり、「基礎力」が独立的に展開するものではなく、思考することで基礎力が定着し、実践することで思考も深まっていく。すなわち基礎があつて、思考できて、実践に移行するというよりも、思考力を要としながら、要素が絡み合って螺旋的に発展していくととらえられるのである。

教科の知識もそれぞれが独立して展開するよりも、新しい能力観では、「社会に開かれた教育課程」で指摘されているように、常

に学んだことを応用的実践的に、日常生活や世界的な動向や期待知と結びつけながら、創造的にとらえていくことが求められる。平たく言えば、「なぜ」「どうして」の問いを持ち続けること、そしてそこに仮説を設定すること、疑問と仮説をこれまでの知識と結び付けてプロセスとしてとらえていくことである。

この過程では普遍化の考え方や因果関係をとらえる思考方法を学ぶことが重要になる。個別の知識や事象が普遍的な認識になるためには、抽象化と捨象化の思考方法が不可欠となるし、知識と知識を結びつける連関思考や因果関係をとらえる思考が、新しい知識・理解を生み出していく。このような思考の機会、教科の中だけでなく、他の教科分野や日常的な現象や身近に見えない部分にも応用的に適用したり、概念的・普遍的にとらえていく思考の方法と習慣を持つことが重要である。「社会に開かれた教育課程」を履行することは、教科の中だけで行うのではなく、教科を超えて考えるものや日常的に考えるものを含んでいる。

このような発想は、元々大学等の高等教育機関が持っていた開発的な発想や研究的思考と連動している。高等教育での最終的な課題は、総合的な創造力であり、新しい分野が常に生み出され再編されていく。現在の専門性も常に新しい知見・技能や創造を進めていくことが求められる。すなわちこのことは、将来的には大学で学んだことも終わりではなく、それを元にして、自らの知識・技能を自ら生み出していくことが、新しい能力として求められていることに連動している。

大学で学ぶ何千もの専門分野は、それぞれが教科の分類とは相対的に独立して展開しているが、同時にどこかの内容において小中学校の教科の単元と連続している。しかし逆に、それぞれの小中学校の教科の単元内容が単純に教科の枠の中で発展して大学の内容になっているのではなく、様々な知識・技能・能力が結びつきながら、概念的に結びつくことで発展していく。すなわち教科の知識・技能もそれを活かす思考や概念形成の中で、新しい知識・技能へと創造的に発展していく。

このように本研究では、あらゆる分野や教科の領域を含めて学力・能力をトータルにとらえ、総合的な能力を育成することが次代の学力・能力形成として重要であることを指摘した。これからの子ども達が生きる力を獲得する上で、それぞれの段階での基礎的な内容と考える力と、それを応用的に適用していく力が結びつきながら、“総合的な能力”が形成され、生きる力の条件となることをとらえた。

以上のように、学力困難層の学力向上策は、総合的な能力を育成することで、いわゆる狭義の学力も向上させることが可能であることを明らかにした。これらの研究成果は、『子どもの“総合的な能力”の育成と生きる力』

(北樹出版、2017年)にまとめて刊行した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

玉井康之「カリキュラムマネジメントを踏まえた地域社会との連携」、教育調査研究所編『教育展望』、査読なし、2016年4月号、2016年、pp39-43

玉井康之「地域協働が求められる時代における教師の資質と教師教育の課題」、日本教師教育学会編『日本教師教育学会年報』、査読あり、第25号、学事出版、2016年、pp36-46

玉井康之「学校教育法第71条 一貫教育逐条解説」、入澤充・岩崎正吾・佐藤晴雄・田中洋一編『学校教育法実務総覧』、査読なし、エイデル研究所、2016年、pp365-369

玉井康之「日本における地域・家庭・学校をつなぐ社会教育行政の展開」、日本教育行政学会編『教育行政学研究と教育行政改革の軌跡と展望』、査読あり、教育開発研究所、2016年、pp131-138

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 3 件)

玉井康之・夏秋英房編著『地域コミュニティと教育』(放送大学講義テキスト)、教育振興会、2017年、pp1-220

玉井康之編著・北海道教育大学釧路校教師教育研究会著『子どもの“総合的な能力”の育成と生きる力』、北樹出版、2017年、pp1-269

内山隆・玉井康之著『実践 地域を探究する学習活動の方法-社会に開かれた教育課程を創る』、東洋館、2016年、pp1-150

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：

種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等なし

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

玉井 康之(TAMAI,yasuyuki)  
北海道教育大学・教育学部・教授  
研究者番号:60227262

##### (2) 研究分担者

阿部 美穂子 (ABE,mihoko )  
北海道教育大学・教育学部・教授  
研究者番号:70515907

諫山 邦子 (ISAYAMA,kuniko )  
北海道教育大学・教育学部・准教授  
研究者番号:70167732

内山 隆 (UCHIYAMA,takashi )  
北海道教育大学・教育学部・教授  
研究者番号:40389648

大森 享 (OOMORI,susumu )  
北海道教育大学・教育学部・教授  
研究者番号:80435990

小野 亮祐 (ONO,ryosuke )  
北海道教育大学・教育学部・准教授  
研究者番号:10611189

小淵 隆司 (OBUCH,takashi )  
北海道教育大学・教育学部・准教授  
研究者番号:50457818

鎌田 浩子 (KAMATA,hiroko )  
北海道教育大学・教育学部・教授  
研究者番号:60301959

鴨川 太郎 (KAMOGAWA,taro )  
北海道教育大学・教育学部・教授  
研究者番号:40535473

川前 あゆみ (KAWAMAE,ayumi )  
北海道教育大学・教育学部・准教授  
研究者番号:50321237

菊野 雅之 (KIKUNO,masayuki )  
北海道教育大学・教育学部・准教授  
研究者番号:90549213

北澤 一利 (KITAZAWA,kazutoshi )  
北海道教育大学・教育学部・教授  
研究者番号:00204884

木戸口 正宏 (KIDOGUCHI,masahiro )  
北海道教育大学・教育学部・講師  
研究者番号:90405093

雲岡 梓 (KUMOOKA,azusa )  
北海道教育大学・教育学部・准教授  
研究者番号:30732888

黒川 友紀 (KUROKAWA,yuki )  
北海道教育大学・教育学部・准教授  
研究者番号:50375375

越川 茂樹 (KOSHIKAWA,shigeki )  
北海道教育大学・教育学部・准教授  
研究者番号:80338433

酒井 多加志 (SAKAI,takashi )  
北海道教育大学・教育学部・教授  
研究者番号:70241403

境 智洋 (SAKAI,chihiro )  
北海道教育大学・教育学部・教授  
研究者番号:40508537

佐野 比呂己 (SANO,hiromi )  
北海道教育大学・教育学部・教授  
研究者番号:60455699

戸田 竜也 (TODA,tatsuya )  
北海道教育大学・教育学部・講師  
研究者番号:60352639

富田 俊明 (TOMITA,toshiaki )  
北海道教育大学・教育学部・准教授  
研究者番号:60584208

土岐 圭佑 (DOKI,keisuke )  
北海道教育大学・教育学部・講師  
研究者番号:60759041

中川 雅仁 (NAKAGAWA,masahito )  
北海道教育大学・教育学部・教授  
研究者番号:10244683

中西 紗織 (NAKANISHI,saori )  
北海道教育大学・教育学部・准教授  
研究者番号:20584163

中村 太一 (NAKAMURA,taichi )  
北海道教育大学・教育学部・教授  
研究者番号:50333654

中山 雅茂 (NAKAYAMA,masashige )  
北海道教育大学・教育学部・講師  
研究者番号:60371150

二宮 信一 (NINOMIYA,shinichi )  
北海道教育大学・教育学部・教授  
研究者番号:80382555

野村 卓 (NOMURA,takashi)  
北海道教育大学・教育学部・准教授  
研究者番号:00507171

なし

早勢 裕明 (HAYASE,hiroaki)  
北海道教育大学・教育学部・教授  
研究者番号:80611201

半澤 礼之 (HANZAWA,reino)  
北海道教育大学・教育学部・准教授  
研究者番号:10569396

平岡 俊一 (HIRAOKA,shunichi)  
北海道教育大学・教育学部・准教授  
研究者番号:70567990

福江 良純 (FUKUE,yoshizumi)  
北海道教育大学・教育学部・准教授  
研究者番号:30710751

村山 昌央 (MURAYAMA,masao)  
北海道教育大学・教育学部・教授  
研究者番号:60142775

山本 悟 (YAMAMOTO,satoru)  
北海道教育大学・教育学部・講師  
研究者番号:80748822

和地 輝仁 (WACHI,akihito)  
北海道教育大学・教育学部・准教授  
研究者番号:30337018

安川 禎亮 (YASUKAWA,sadaaki)  
北海道教育大学・教育学研究科(研究院)・  
教授  
研究者番号:50710753

森 健一郎 (MORI,kenichirou)  
北海道教育大学・教育学研究科(研究院)・  
准教授  
研究者番号:70710755

大滝 孝治 (OOTAKI,kouji)  
北海道教育大学・教育学部・講師  
研究者番号:90750422

津田 順二 (TSUDA,jyunji)  
北海道教育大学・教育学研究科(研究院)・  
教授  
研究者番号:50634565

廣田 健 (HIROTA,takeshi)  
北海道教育大学・教育学部・教授  
研究者番号:30374755

(3)連携研究者  
なし

(4)研究協力者